Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

No.119
2014年4月1日

〈URL〉http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

表紙絵　金バザール裏の路地／画・甲斐大策

連続堰の完工、両岸の安定灌漑を保障　中村　哲
援助を継続した唯一の団体として誇りを　モハマド　シャフィーク教授
アフガン国内診療所開設の日々　モハマド　ヨセフ
「明日を信じて」そして「平和は忍耐」　中村紀美子
決して水路を途絶させてはならない　石橋忠明
圃場整備から用水路工事まで　ムヒブラー
◉カラー特集　ペシャワール会30周年特集　第３回　空爆下の緊急食糧配給と「緑の大地計画」の開始

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

連続堰の完工、両岸の安定灌漑を保障

――名状しがたい焦燥の中での用水路工事

PMS（平和医療団・日本）総院長／ペシャワール会現地代表　中村　哲

再沙漠化の懸念

みなさん、お元気でしょうか。

私たちは相変わらず河の中です。増水期を前に、工事を急いでいます。

この一年間はまた特別でした。「緑の大地計画」の最大の山場と見たマルワリード＝カシコート連続堰を完成し、昨夏に大暴れした大洪水の爪痕を修復するのに追いまくられてきました。職員・作業員共々にへとへとになっていますが、もう一息です。

「連続堰」については二年前からしばしば会報でも触れてきました。マルワリード用水路に年々用水が乗らなくなり、再沙漠化の懸念が重くのしかかっていたのです。二〇一〇年の大洪水で堰をかけた中州が流失し、深刻な状態が続きました。これが以前の沙漠化した状態であれば、さほど問題にならなかったでしょう。今や用水路流域には十数万の人々が帰農し、生活しています。それが無くなるのです。いくら長大な用水路でも、水が流れなければ無用の長物です。あれほど希望をかきたてた「ガンベリ沙漠の緑化」の努力も、露と消えます。

「アフガン農村の復興のカギは取水技術の改善にある」と叫んでも、肝心のマルワリード堰が機能不全に陥れば、取り返しのつかぬことになります。

カシコートという壁

その時の焦燥は名状しがたいものがありました。他方でカマ郡、ベスード郡の主な取水堰と水門を手掛けながら、カシコート側との和解を進めてきました。

堰の完成は、どうしても対岸からのアプローチを必要とします（5頁図参照）。しかし、対岸カシコート地域との対立がそれを阻んでいたのです。カシコートは陸の孤島と呼べるところで、閉鎖的な世界を作ってきました。もっともアフガン農村社会はどこもそうで、険峻な山岳地帯の隙間で、まるで荒波に洗われるカキ殻のように村落群がはりつき、それぞれの世界を作っています。同地域は交通の便が乏しいことも手伝って、特にその色彩が濃厚でした。誰も恐れて近づこうとしません。

洪水の激流をかわす水制を造る中村医師。カシコート取水門から上流1km地点（2014年2月）

この近づきがたい壁に転機をもたらしたのが二〇一〇年夏の大洪水でした。長くなるので、以下出来事を羅列していきさつを伝えます。表を見てください。

二〇〇三年三月	マルワリード用水路着工。
二〇〇四年六月	ECの団体がカシコート側の要請でクナール河主流を閉塞、右岸マルワリード側に主流が移動。
二〇〇五年～	河沿いのマルワリード用水路が各地点で決壊。
二〇〇六年夏	沈砂池が決壊。護岸工事をめぐって両岸が対立。
	十二月　マルワリード堰、第四次改修で河道全面堰き上げを敢行。
二〇〇七年	主要河道の変化でシェイワ堰取水困難。同用水路全域で渇水。
	マルワリードG区間が部分崩落。大規模な河道回復と護岸工事。
二〇一〇年二月	マルワリード用水路全長開通。ガンベリ沙漠開拓が始まる。
八月	カシコート全域で洪水被害甚大、クナール河の主流が蛇行進入し、広範な地域が水面下に没す。マルワリード用水路、洪水で一部決壊。取水堰のかかる中州が消失。流域で深刻な水不足。
二〇一一年一月	マルワリード堰第五次改修のためカシコートに渡った重機・ダンプが拿捕（だほ）され、一部指導者が「支援」を要求。PMS、要求を拒絶して車両を奪回。
十月	カシコート自治会が謝罪、PMS側と和解。復興を約す。
二〇一二年二月	PMSと自治会、州行政の首脳をカシコートに招いて「行政側の指示」として着工。第一期工事を開始。以後三カ月間、総動員態勢で蛇行河道を旧に復し、取水堰工事の基礎を置く。
十月	連続堰建設が開始される。
十二月	カシコート取水門完工。中州を復旧して第一期基礎工事を完了。
二〇一三年夏	断続的に大洪水来襲、堰の一部決壊。
十月	第二期取水堰工事を開始。主幹水路一・七km通水。
十二月	連続堰を通過する河道の分割・固定と交通路確保を完了。
二〇一四年三月	連続堰完工。主幹水路二km、堰前後の護岸四kmをほぼ終了。

クナール河左岸の主流閉塞のため、右岸へ流れが押し寄せ洗掘され国道が崩れた。国道の右側にPMSの用水路E区がある。

長年の悲願だったマルワリード堰内河道②の改修が始まった（2013年12月）

和解の果実

最終的に完成したのは、三月に入ってからでしたが、その決定的瞬間は、去る十二月十九日のことでした。夏の洪水時に大量の水を吐き出すため、復旧した中州の中に河道を造成、交通路を設けた時でした。これでマルワリード側の堰改修が容易になり、取水量を制御できるに至りました。専門的なことは割愛しますが、暴れ川を六つの河道に分割して固定、各河道に橋をかけ、改修時に資機材を輸送できます。巨大なクナール河の水を分け、一つ一つを処理する方法でした。

堰長五〇五m、堰幅五〇～一二〇m、全面石張りで面積二万五千㎡、夢のような構想がここに現実となりました。

「再沙漠化」の脅威が消え、両岸の安定灌漑が保障され、恵みが約束された瞬間でした。しかも、汗と泥にまみれ、彼ら自身の手で成し遂げた仕事です。当日、全ての現場職員は涙を流し、抱き合って喜び、互いに労苦をねぎらいました。尋常でない喜びの様子は、知らぬ者が見れば、気の狂った集団かと思えたでしょう。それ程、みながこの連続堰の大切さを知り、一丸となって仕事に当たったということです。この瞬間に垣間見た輝きは、どんな対立も忘れさせる圧倒的なものでありました。和解から二年、マルワリード用水路着工から十年余の月日が流れていました。

年月をかけて既存水路を拡張

本連続堰が「緑の大地計画」の頂点と呼べるものでした。これによって、地元勢自身の手で「安定した取水灌漑」、「気候変化に適応できる技術」が完成に近づいたと言えるからです。用水路末端にあるガンベリ沙漠の開拓は、不動の基礎を得ました。

カシコート堰内河道④の改修工事。昨夏の大洪水による決壊部。河の中での作業は厳しい（2013年12月）

一方、最貧困地帯のカシコートには、緑が押し寄せようとしていて、人々が続々と帰郷しています。PMSでは、これから年月をかけて既存水路九・五kmを拡張し、耕地を更に増やし、水稲栽培を一般化する試みを実行しようとしています。

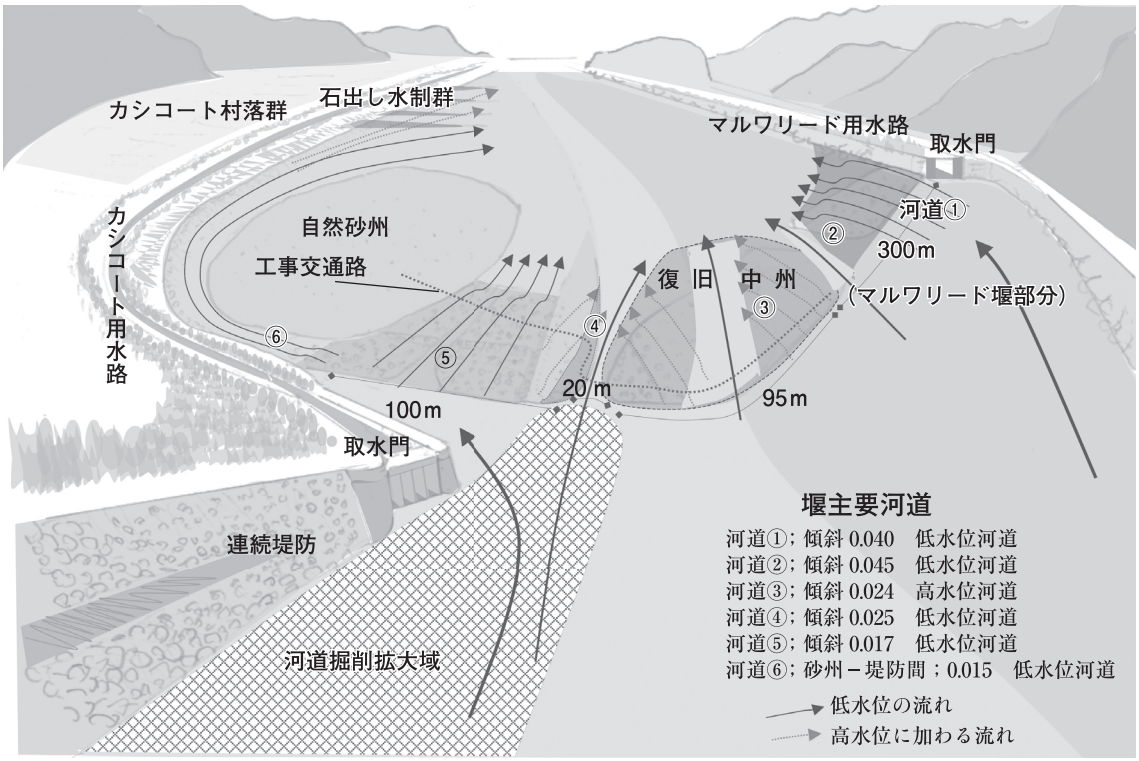
知られない「国内難民」

この間、アフガンの戦局や政局はめまぐ

るしく変化しました。そして今、外国軍の完全撤退を控え、著しい混沌と治安悪化に多くの者が脅えています。その背景には、進行する農地の乾燥化と、農村から叩き出された膨大な「国内難民」の存在があることは余り知られることがありませんでした。実際、ジャララバード南部に拡がっていた一大穀倉地帯が消

15㎝の超低水位でも潤せるよう設計されたベスード第一堰だが、河川の増水期に3㎝まで低下。臨時改修を行った(2014年3月3日)

右:カシコートで農地が回復し帰農した家族。野菜の苗を植える。



マルワリード＝カシコート連続堰完成図

降雨がほとんど無く、たとい高山に雪が積もっても暖冬ですぐに解けてしまう。作業地から見るダラエヌール（ケシュマンド山脈）

滅し、人々は不安に駆られています。でもそれはずっと前から予測されていたことです。だからこそ、私たちの努力があったのです。「もう、だまされない。」みな、そう感じ始めています。

今冬のアフガンの少雨は政局以上に暗雲です。高山に雪が余りありません。気候変化は年々規模が大きくなり、未曾有の洪水が頻発すると同時に、河川の冬の低水位は、二〇〇二年に記録を始めてから最低となりました。飢饉が二〇〇〇年を上回る可能性もあります。政変と重なれば、手におえない状況になるでしょう。

知の傲慢は暴力

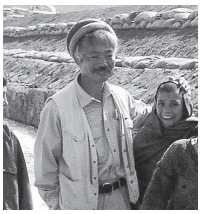
人も世も様々です。今さら無理解の壁を嘆いても悲しいばかりです。せめて東部アフガンの一角で人々が生き延びる望みを得たこと、その実証に祈りを託すのみです。

確かに私たちはアフガン人に成れないし、アフガン人は日本人に成れません。だが、その壁を厚くするような昨今の風潮―自然を無視して宗教や文化、生活様式まで裁き、そのためには戦争も肯定しかねない流れ―は危険です。知の傲慢が暴力ともなります。

違いや矛盾をあげつらって拳を上げるよりも、血の通った共通の人間を見出す努力が先だと思います。私たちの活動が、このような壁を超えようとする努力と、温かい他者への関心の結実だとすれば、これに勝る喜びはありません。そして、これが譲れぬ一線でもあります。

仕事はまだまだ続きますが、これまでの支えに心から感謝します。

二〇一四年三月　ジャララバードにて



中村（なかむら）哲（てつ）…九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン・カイバル・パクトゥンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。以来三〇年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千六百ヵ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約五万五千人（二〇一二年度）。

◎ペシャワール会発足30周年記念特集　第三回

援助を継続した唯一の団体として誇りを

PMS会長
モハマド　シャフィーク教授

先ずはじめに、この場をお借りして日本のペシャワール会事務局の皆様ならびに会員の皆様に、三〇周年のお祝いを申し上げます。

貴会のパキスタンにおけるプロジェクトの創設委員および会長として、このプロジェクトが各活動分野において、この三〇年間に大きな成果を残して来たことを大変名誉に感じております。援助が最も必要な時にパキスタンおよびアフガニスタンの貧しい人々を助けた中村医師及びPMS職員たちの努力と献身には、素晴らしいものがありました。

パキスタンのテロ襲撃地域やアフガニスタンの戦乱地域で任務を果たす中で、彼らが示したその勇気は、真に称賛に値するものです。現地の治安情勢が悪化する中、米国や地元政府が外国からの派遣団やNGO団体にアフガニスタンからの撤退を求めた後も、地元住民への援助を継続して行ったのは、唯一PMSだったことに、私は大きな誇りを感じています。今も、PMS以外に現地で活動をしている外国人はほとんどいません。良心を持たない悪党達の手によって職員の方の命が奪われた後も、彼らはひるまずに人道的活動を続けました。彼らは、人類に奉仕するという使命のもとに身を挺して事を行う人間のよきお手本であります。

また、広くは病気治療全般、殊にハンセン病撲滅におけるPMSの尽力は高く称賛されるべきものです。今はパキスタンを離れてしまわれましたが、住民は今もPMSの皆さんがカイバル・パクトゥンクワ（旧北西辺境）州の貧しい人々に医療サービスを提供してくださったことを覚えています。

また、献身的なPMSの皆さんと日本人ワーカーの後ろには日本の皆様の素晴らしいお力添えがあることにも触れないわけには行きません。日本のペシャワール会会員・支援者の皆様の寛大なご厚志があればこそ、会の事務局や日本人ワーカーの方々がパキスタンとアフガニスタンの困窮する人々を援助することが出来るのです。皆様の財政的援助なくしては、PMSの活動は不可能になってしまうでしょう。

最後に、ペシャワール会会員・支援者・事務局の皆様が、これからも世界で救いを求めている人々への献身的な援助活動を続けられることをお願い致します。貴会の今後の益々のご発展をお祈りいたします。

皆様に幸せと神の祝福がありますように。

日本・現地合同理事会（2002年4月）。右から三人目が現地会長のモハマドシャフィーク教授、二人目が副会長のDr.イクバルサフィー氏。

アフガン国内診療所開設の日々

PMSダラエヌール診療所・検査技師
モハマド　ヨセフ

一九九一年からJAMSに

私はタージモハマドの息子で、モハマドヨセフと申します。ナンガラハル州ダラエヌール郡に住んでいます。一九九一年にジャパン・アフガン・メディカル・サービス（JAMS）に職を得、最初の一年間に検査室業務の訓練を受けました。

私の職務の話をする前に現在のPMSについてご紹介したいと思います。一九八六年、中村先生はペシャワールにアフガン・レプロシー・サービス（ALS）を開設し、パキスタンのアフガン難民への医療サービスを開始しました。

ALSは特にハンセン病患者を治療していましたが、それ以外の患者もここで治療を受けることができました。同診療所はペシャワール市のアブダラ地区にあり、職員は全てアフガン人でした。

一九八九年に中村先生とアフガン人医師ドクター・シャワリが診療所の業務内容を拡大し、名称もALSからジャパン・アフガン・メディカル・サービス（JAMS）に変更しました。この頃、中村先生は外科手術も手がけておられ、多くの患者が先生の施術を受けました。アフガニスタンやパキスタンではまだまだ深刻な病である癲癇（てんかん）の患者は無料で治療を受けることが出来、その資金は日本の方々から提供されています。

テメルガル診療所

その後、一九九〇年に中村医師はパキスタン北西辺境州（現カイバル・パクトゥンクワ州）・テメルガルに診療所を開設しました。この診療所は隣接するバショワール自治区にある、トール、シシ、チャクダラ、ダマドリ、セラリと言ったアフガン難民キャンプに住むハンセン病患者やその家族の診療にあたりました。私達の検査室では、患者や疑いのある人から採取した組織液（菌検査用）のスライドを検査したり記録報告書を作成したりしました。

ハンセン病患者へは毎月治療薬を渡しました。診療所では毎日ハンセン病以外に外来患者約二〇〇名の診療をしました。診療所で診察を受けた患者は薬を無料で受け取る事が出来ました。これら一連の活動は中村先生の努力と指導の下に実施されました。

中村医師へ報告中のヨセフ検査技師

一九九一年にアフガン国内診療所

一九九一年、中村先生はアフガニスタン国内で患者治療が出来るようにと診療所を開設しました。そのお陰で地域住民の医療問題が解決されました。これに先立って中村先生が現地調査に行かれた際、私も同行しました。

まずパキスタンのペシャワールを出発してションカリ山脈からデュランドラインを越え、カスクナールを通過して夜半にアフ

（13ページに続く）

【カラー特集】ペシャワール会30周年特集

第3回　空爆下の緊急食糧配給と「緑の大地計画」の開始

上：積み込み。小麦粉と油はペシャワールで買付け、輸送時は病院の職員が同行した。

上、右：配給を受け帰宅

◎国内避難民への食糧配給と緊急移動診療

2001年、首都カーブルには、大旱魃（かんばつ）と内戦のため各地から国内避難民が押し寄せた。同年3月タリバンの一部急進派がバーミヤンの大仏を爆破したあと、国際支援団体のアフガニスタン引上げが始まった。PMSは同月カーブルに5ヵ所の診療所を開設。だが9月11日のアメリカ同時多発テロ事件の後、全ての支援団体が撤退したため、厳冬のカーブルで人々が越冬できるだけの食糧配給を決定。その後、アフガン空爆が始まってしまったが、食糧配給計画は続行された。

◎緊急移動診療

上・右:2001年12月、ナンガラハル州で悪性マラリアが流行したため、緊急移動診療を開始。各地で診療をした結果、幸いにもマラリア患者は少なかったが、どこも医療過疎地であった。

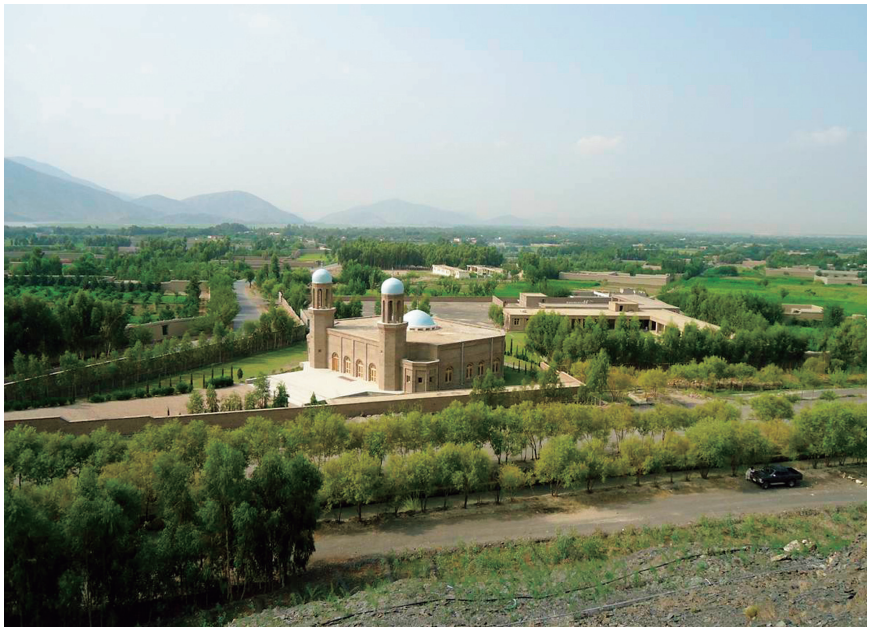
◎「緑の大地計画」と試験農場の開設

上・左:2002年ダラエヌール渓谷に試験農場を置き、茶、サツマイモ、ソルゴー他、多種の作物栽培を試みた。飼料用の「アルファルファ」はガンベリ沙漠を開拓した試験農場で現在も栽培中。

◎マルワリード用水路の建設

右：取水堰。巨礫で斜め堰築造。
上：水不足の時は水吐き（砂吐き）を石で堰止める。洪水時は余分な水を河へ戻すよう工夫。

用水路の両壁には蛇籠を使い、背面には柳の挿し木を施した（蛇籠工、柳枝工）。鉄砲水などで用水路が壊れたら（上）、ワイヤーで籠を編み石を詰めた蛇籠を置き、柳の枝を挿して修復する（左）。流域住民たちの手による維持管理が可能であるよう工夫。



◎地域共同体の復興

2010年、シェイワ村に地域共同体の要であるモスク（イスラム教寺院）とマドラサ（伝統的な学校）を完工した。附属の寄宿舎も併設。用水路により農地が回復し、多くの難民が帰還している。

◎繰り返す洪水と渇水――今なお進行中の旱魃

上:2012年完工したベスード第二堰。2013年8月3日の大洪水は対岸の人家をも襲ったが、取水門が洪水の流入から地域を守った。
下:洪水後急激な渇水に陥った同地(2013年8月28日)。年々進行する気候変動は極端な洪水と渇水が同居する事態をもたらしている。

（8ページより続く）

ガニスタンのクナール州チャウカイに着きました。そこで一晩を過ごした後、午前中にチャウカイを発ち、ヌールガルを通ってナンガラハル州のダラエヌールに到着。同州ソラク村で昼食を済ませ、夜はアムラ村で夕食を摂り一泊しました。

翌日、同郡の中心地から遠く離れたワイガル村に到着すると、中村先生は地域住民に接触して彼らが抱えている問題を聞き取り調査しました。

続いてダラエヌール郡のカンダック、シモール、ラマタク、マジガンダール、スータンの各村を回って現地調査を実施してパキスタンに戻って行きました。

そしてこの後、ダラエヌール診療所を開設したのです。同診療所は、一九九四年に中村先生の指示の下、ＪＡＭＳ職員たちが建設しました。診療所は今も医療サービスを継続しており、毎日二〇〇人余の患者を診療しています。

ダラエピーチの診療所は一九九二年に開設しました。ここでも毎日二〇〇人余の患者が診療を受けていました。同診療所開設以前、地域住民は沢山の問題を抱えて苦しんでおり、治療を受けるためにはひどい悪路を五〇キロ離れたアサダバードまで行かなければならないという状況でした。

その後しばらくして、中村先生はヌーリスタン州ワマ郡訪問を決断されました。私はこのときも調査団の一員として同行しました。私達一行が三〇キロの道のりを歩いて到着した村は、住民は一度も医者を見たことがないというところでした。地域住民の苦悩や問題を聞いた中村先生は、この地に住む人々が必要としている診療所を開設することを即座に正式決定なさいました。

自前の診療所を建設するまでは借家で診療をしました。ピーチの診療所の二〇〇三年建設に続いて、ヌーリスタンのワマ診療所が建設されました。

忘れられない援助の数々

中村先生がペシャワールのパワケイ地区に外科処置室や手術室、医療棟を含む大病院ＰＭＳ病院を開設なさったことにも言及しない訳にはいきません。同病院はこれまでにアフガン難民を含む数百万もの患者に医療を提供しました。また先生はパキスタンのコーヒスタンやチトラルにも診療所を開設なさっています。ＪＡＭＳがＰＭＳとなってからは、以下の活動を実施しました。

・食料配給プログラム
・水供給事業
・農業計画
・灌漑事業

灌漑事業ではヌールガールのジャリババ地区から大規模水路建設を開始し、ガンベリ地区まで作り、今では一万五千ジェリブ（面積単位：千ジェリブ＝二〇〇ヘクタール）もの土地が灌漑されました。

三〇年間にわたり中村先生によって実施されたこれらの事業は、国内外のアフガニスタン人に決して忘れることの出来ない援助と恩恵をもたらしたことは特筆に価します。私がこの文章の中で紹介したものは、そのほんの一部に過ぎません。

これからも中村先生が、私達アフガニスタン人への支援を続けてくださることを願っています。そして先生がこれまでにアフガン人社会に注いでくださったご支援に深い感謝を申し上げます。

ＰＭＳ（ペシャワール会）三〇周年にあたり、その偉業を称えつつ、ペシャワール会の皆様に心よりお祝いの言葉を申し上げます。

▼未使用の切手、ハガキを！▼

＊会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

＊一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

「明日を信じて」そして「平和は忍耐」

アジアを考える会北九州
代表　中村紀美子

心に深く響く言葉

「今年は先生お元気そうだったね」
「今は疲れておられるみたい、大変なんだね」

いつの頃からでしょうか、中村哲医師にお会いする度に私どもの間でそんな会話が交わされるようになったのは。

一九八二年十二月、マザーテレサの活動を知った北九州市内の女性たちが「インドを考える会」を発足し、その後「アジアを考える会北九州」（アジカン）と名称を変え現在に至っています。

アジカンは、岩村昇医師が提唱されたＰＨＤ運動に共感し、同時にペシャワール会の中村医師を応援することを中心に活動をしています。

ペシャワールから初めて帰国された年に中村医師を小さな教会にお招きして、活動についての説明、考えをお聴きしましたが、その時の参加者は十数名でした。アジカン会員は、転勤、海外移住などで入れ替わりながら現在は一〇名で活動しています。

その後、毎年七月に、酷暑のパキスタン北西辺境州から戻られる中村医師をお迎えして、教会の会堂などで報告会を開いていましたが、その頃は報告会を開く度に、中村医師の人柄、活動内容、ペシャワールの位置など一つ一つの説明が必要でした。

九一年当時の議事録を見ると、《前年四五名に較べ今年は雨のためか三四名と少なかった。それでも新来者が多かったので、中村医師の本「ペシャワールにて」が一〇冊売れ、ペシャワール会の新入会員を得たことは大きな収穫でした。会食はメンバー手作りのちらし寿司。中村医師の体調が悪いのを気遣って心持ち早めに切り上げました。》とあります。

「金太郎飴のような話ですが」と報告をする中村医師は、ハンセン病患者のための靴のワークショップを始め、現地の実情に即して、常に病と闘う弱い立場に立った人々へのまなざしがあり、同時に湾岸戦争、バブルに沸く日本の危うさなどを大海に漂う豪華客船に例えて、鋭く指摘しておられました。いまだに忘れられず心に深く響く言葉です。

激動に比例して参加者増

九三年にアフガニスタン東部で悪性マラリアが流行し、「二二〇円のキニーネで一人の命が助かる」というキャンペーンの時には支援する私たちも改めてかの国の貧しさを認識したものです。

九八年、ＰＭＳ病院が設立された時には、開院式に当時のアジカン代表の加藤がその一員として参加しました。

支援一〇年目に報告会を開いた時に、参加者が念願の一〇〇名を超え、その後、小倉北区の男女共同参画センター「ムーブ」に報告会場を移し、支援の輪がさらに広が

アジアを考える会北九州の皆様

りました。

アジカンは「明日を信じて」の表題を掲げ報告会を開いていましたが、ある年、講演の中で「明日なぞ信じられません」と言われたことがありました。現地での活動の辛さ、厳しさを垣間見たようで、今も「平和は忍耐である」ことの意味をかみしめています。

その後一〇年の間に、大旱魃が進み、井戸掘り、バーミアンの仏像破壊、九・一一事件に続くさまざまな出来事が起こり、中村医師から「金太郎飴」という言葉が消えました。

激動に比例して、年々報告会の参加者が増し、ムーブでの最後の年となった二〇〇四年には部屋に入りきれず通訳ブースを開放しました。

翌年、メンバーの一人内山が館長をしていた高槻市民センターでの報告会では、地域の皆さんが看板作りから警備まで引き受け、参加者は三〇〇名を超えました。その後も地域ではペシャワール会の支援が続いています。当時小学生だった子が「お話を伺って看護師になりました」とカンパを郵送してきたこともあります。

二〇一〇年には、中村医師の報告会と「ペシャワール会二七年の歩み」写真展を同時開催し、現地から戻った若いスタッフたちとの交流は新鮮でした。

この間、福元事務局長や藤田看護師をお招きして講演会を開いています。九〇年の議事録に「藤田看護師、九月赴任」と書かれており、彼女からペシャワールカレーのレシピを頂いたことを懐かしく思い出しました。

現会員の、東、内山、北井、小林、斉藤、関永、永井、中村は活動歴二二年以上で、孫の世話、親の介護、地域活動などをする齢になりましたが、命を見据えて、当初から軸足を変えることのない中村哲医師を今後も応援し続けます。

▼郵送方法の変更について▼

＊一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

＊ご寄付をお送り下さった郵便払込用紙は、郵便局からコピーで届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼寄付をしてくださる皆さまへ▼

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願いいたします。

サファル・バハエル！（良い旅を）――――17

パハワル

甲斐大策

五百年前、神話から生れて数千年を経た都に、カーブルを遁れた一人の王が砦を築き、インド制覇を目論む。乾涸と飢えと争いの西方から、豊穣の地を欲した数々の民族東向の一つだった。その都パハワル[註一]は今も在る。

砦裏のモスクへ、陽光を遮る高層の建物が両側に迫る急坂が伸び、道沿いに並ぶ金専門店の眩しい光が路面にこぼれ出ている。山を降りてきたパフトゥン[註二]の族長は、老妻と娘たちを伴ない浩然とモスクへ向い、護衛の若者たちも従う。一時間後、祈り終えた族長は、モスク入口脇の高級ルンギ（チャーダリ）屋へ、女達は黄金の光の中へ入る。いそいそと覆衣の前を開き、金製品を覗きこむ。此の地の殆どの女性には生涯無縁の時間である。

金バザールから分れた路次が、谷底の隘路のようにこの地区の最奥へ向い、そこに小さな工房が連らなる。祖父、父、孫と三代が、鏨を打ち鑞付けし、鞴の柄を押す。大きな牛乳缶を背に振り分け、路次奥の出前チャイ屋へ運ぶ驢馬の脚は、擦り減って丸味を帯びた石畳を用心深く踏む。工房からの炭と酸の臭いにチャイの甘い香りが混ざって路次に流れる。夕べのアザーン詠唱が一帯を包み、世俗の慾が極まる黄金の店々も、槌の音が響く工房も、黙々と歩を進める驢馬も、富も貧もパハワルの中天へ昇華してしまう。

ペルシャ王もマケドニヤ王も来ては去った。モンゴルの大ハーンもその末裔も長くは留まっていれなかった。その去来の全てを仕切ってきたのはパフトゥンである。

パハワルが胎蔵する全生命の一つとしてパフトゥンは育ち、やがては母胎の強靭な被膜そのものと成り、神への絶対の信と部族の律を、スレイマン山脈の不動の岩盤と変らない魂としたパフトゥンの心に、西欧寄りの善悪の秤や国家の規範が立ち入る余地はない。

パハワルは今日も熱い母胎である。

註一パハワル…ペシャワルの現地音
註二パフトゥン…パシュトゥンの現地音

◎ワーカー通信

決して水路を途絶させてはならない

PMS現地連絡ワーカー
石橋忠明

沙漠が果樹畑に

「うーん、ヤワな空気では無い。」

現地着後の第一「皮膚感」である。

カーブル空港は、うっすらと雪化粧をしていた。タラップを降りた途端、同行の村井君の携帯にPMS事務職員のサブールから到着確認コールが入る。応えると、すぐさまジア医師に報告の電話。彼はすでに現地モードである。

三年ぶりの自分は、ここのタフな空気について行くのに必死だ。歴史、民族、自然（高山）、言語、宗教（殆どがイスラム）、習慣、風習、そして旱魃と戦争……、諸々が交差交錯し合っている。この「ヤワでないタフさ加減」は、言葉では表しにくい。とにかく、「生き残ってゆくバイタリティー」が不可欠なのだ。

到着出口に向かう人波には、ダリー語、パシュトゥー語が溢れかえっている……。

その後の記憶は、マルワリード用水路終点の開拓地に飛んでいる。

「ガンベリ、チェルタデイ?」「デルタデイ」、ガンベリ沙漠の場所を聞くと、この緑豊かな防砂林と、果樹畑一帯がそうなのだという。二六〇mのシギサイフォンを見て、試験農場に着いた時のことだ。以前、測量で来たときの沙漠の面影は全く無い。

畑には、小麦、キャベツ、ニンニク、レモン、オレンジ等、様々な作物が栽培されている。日雇作業員と共に凄まじい勢いで一〇〇〇本のオレンジを植えていたザミールグルが、懐かしそうに駈け寄って来る。「足はどう?」（彼は以前大けがをした）「もう大丈夫ホラ!」なんて言っているうちに、砂が舞って植樹が次々に進んで行く。作業員たちは「メルマーナ（客人）」が来ているので張り切っているのかな、と思いきや、いつもこうなのだ、という。蛇籠も、一日、二〇人で、三〇個（一m×一m×二m）分石組みするという。報告写真で見た取水門水路の出来栄えと速さの源を発見した気がする。因みに、柑橘類は数万本単位で植樹し、経済的効果も目指す。

植樹を始めた頃のガンベリ沙漠

途絶えさせてはならないもの

スランプール（用水路六km地点）で、初めて荒地が農地に変わってからは、皆元気が出て凄い働きぶりだが、加速度も付いて

来ている。家族が食う為に必死なのだ。と、ここまで考えたその時、ふっと重圧感を覚えた。ここまで、いやこれからも農地を拓いて行くということは、水路の水を決して途絶えさせてはならない、ということだ。いや、水が止まったら、皆を喜ばせた分だけ罪が重い。取水門水路本体は勿論、肝心の堰、護岸、河道修正等の作業を「常に」適切に行い補強する必要がある。現に今も、ベスード側の昨夏の洪水進入部に水制を作って、河道を修正しようとしている（これは主に洪水対策である）。つまり完成後、水路の水を正常に流す為に不断の努力が要るということだ。この当然のことが、意外に分かりにくい。水路を作って水を流し、畑を作れば食べて行けるが、水路や、堰が壊れて水が来なければ、また畑が砂漠化し、喰えない、ということだ。現在、各水路の合計で、一六、五〇〇ヘクタール、六五万人が安定して食べられ、生活して行けるようになりつつある。水が来ないと、六五万人が路頭に迷うことを意味する。水を取り入れる為、洪水を防ぐ為、中村医師が必死に手を尽くすとき、アフガンの水路回りの河川も日本の信玄堤（しんげんつつみ）のように、さまざまな河川技術が施されるのだ。

　このガンベリ沙漠から一転、今少し楽しげな（これもまた、現地感覚では語弊があるが）、観覧車にも似ている灌漑用水車に移動する。現在二機あり、第二機目は、D池の先、鈴木学君たちが作った水道橋出口に設置されている。直径五・二m、床面から三・五mの高さまで揚げる。鉄製で、三〇〇kg。中心は、発電機用のベアリング。工費は一〇万円（付帯設備を入れても二〇万円）。現在、カンレイ村の一八〇ジェリブ（数百人分を養える農地）を潤している。ディダール技師が暗算して、つまり三六ヘクタールだね、と頷く。ここで取水しても、手前にD池があるので、下流側の流量が減

中村哲【最新刊】著者初の自伝！

自然と人間、人間と人間の根源的なかかわりを問い直す

天、共に在り

アフガニスタン三十年の闘い

四六判上製260ページ（内カラー4ページ）

定価：本体1600円＋税

第一部　出会いの記憶 1946～1985

第二部　命の水を求めて 1986～2001

第三部　緑の大地をつくる 2002～2008

第四部　沙漠に訪れた奇跡 2009～

NHK出版

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町41番1号

電話：03（3464）7311（代）

FAX：03（3780）3353

樹木の成長したガンベリに、水不足で壊滅したソルフロド郡の果樹園から大量の苗木を総動員で移植。今季は5000本植える（2014年2月）

用水路現場で重機の操作を現地作業員に教えるのも大きな役割だった。石橋ワーカー（2004年3月）

らない。水車を回す為、床をコンクリートにして、補強する。住民は大喜びだ。これで高い燃料を使って三mをポンプで汲み揚げないで済む。

どっと・笑い・コム

この後、元州灌漑局長たちとアコモデーション（現場事務所）へ昼食に行く。ガンベリの畑から持ってきた紫キャベツも食べる。このキャベツも二五キロメートル上流の取水口からの水で育った。甘くてうまい。一〇年間の水路掘りの苦闘が報われた感じがする。

暗くならないうちにと、先ほど述べたベスードに移る。中村医師が、スタッフ達と水制を作っている。現場仕事をしている時は元気だ。中小企業のオヤジの如く、財政・会計・事務・人事等見えにくい部門の心労が、孤独で、きつそうだ。

耳の不自由なベラや、ヤールママ、タラフダールさんたち、みんなも元気だったなあ……一〇年の灼熱下の「闘い」に思いを馳せつつ事務所に戻ると、会計室でスタッフが待っていた。今回は会計がらみの仕事だったのだが、ここにも笑いがある。

日本での話。留守中の連絡の件で息子が、「オヤジ、スカイプで交信すると無料だ。それで交信しよう。」「よし、おれのも君のもカメラ付きだから、テレビ電話にしよう。」すると息子、「いや、画像は無しにしよう。」それを聞いたスタッフ、なぜか大爆笑。

サブールが私のIDカード作成の為に部屋に来た。書類に私の名と父親の名を書く欄があった。彼はなぜか書類を指して、「ブラックグループ」と言った(と思った)。我々父子の事だと思い、むっとして、「いやホワイトグループだ」と言い切った。彼はきょとんして、「あのー、ブラッドグループ（血液型）教えて」……。また同じく彼、何かの時、誰かのアドレスを聞いてきた。こちらの答えに対して彼が再確認する。最後の「ドットコム」の言い方が面白いので、私もおおげさに繰り返す。それ以来、話の終わりにはかならずドットコム。

今回は、諸般の事情から、早々と帰国。カーブル空港。人ごみをかき分けチェック

必死に続けられる昨夏の洪水の後始末

イン。スタッフから、「大丈夫か？」、と心配の電話。「いやあ、ドット混む。」

今出来る最善のことを

途中北京に寄る。揚子江、黄河だろうか、水が驚くほど少ない。一三億の民が生活するには、とても足りないのではないか。

アジア中、世界中旱魃なのだ。本当に、戦争やけんかなどしている時では無い。今出来る最善のことをしたい。アフガン水路の現場は、アフガン人が、中村医師の指揮のもと、殆ど全てをこなしている。焦眉の急は、事務方（ジア医師の統率の下、改善が進んでいるが）、なかんずく会計であるが、これも、徐々に現地との連絡を密にして解決されるだろう。自分としては、以前は、水路ワーカーとして重機操縦、測量などを担当してきたが、上記のように現地の人たちの活躍により本来のあるべき姿になったので、現地情勢を皆さんに伝えたりするなど、裏方に徹してゆきたい。

……久しぶりに戻った日本は、大雪の名残が林間にちらほら。でも、もうすぐ春だ。しかし現地では旱魃が今だに進行し、水路・河川工事はずっと続く。

皆さんお元気で。そして引き続き、ご理解とご協力をお願い致します。

◎現地スタッフ通信

圃場整備から用水路工事まで

PMS職員（現場監督）
ムヒブラー

私は、ナンガラハル州ソルフロッド郡シャムシャプール村出身で、グラジャンの息子でムヒブラーと申します。

PMSジャパンには二〇〇三年三月二日より勤めております。干ばつに襲われているソルフロッド郡での水源確保事業の勤務に始まり、その後同郡カクラックそしてバラバーグで井戸掘りに従事しました。それからPMS診療所に併設されたダラエヌール事務所に配属され、事務所責任者の橋本さんからシェイワ郡ブディアライの上流域を潤すため小水路造りに任命されました。

その後、マルワリード用水路作業地へ移り、同水路のC区第一セクションで蛇籠の設置を担当しました。続いてザルガルヌー橋地点までのD区の岩盤で発破作業チームで働いた後、鈴木さんとF・G区で働きました。

そしてI区からガンベリ最終地点までの水路床工事を担当した後、ガンベリ沙漠でPMS試験農場の開墾作業に加わり、圃場を整備して行きました。しばらく農業プロジェクトで作物の栽培にも携わっておりましたが、わが尊敬する中村先生のオーダーで、シェイワ地区の隣のシギ地区下流域への灌漑路をガンベリ沙漠のマルワリード用水路末端から引くシギ分水路とその交通路整備に取り組み約一年かけて完成させました。その後ガンベリ沙漠の試験農場で農業部門に戻り作物の栽培をしております。

シギ下流域の灌漑に分水路を引く（左がムヒブラー現場監督）

●事務局便り

＊中村医師がパキスタンのペシャワールで活動をはじめて、この四月でまる三〇年になります。短いようで長い歳月、かつての青年医師も髪に霜を戴くようになりました。会の活動は、中村医師がミッション病院のハンセン病棟に赴任したのが始まりですが、医療器具も粗末な「安宿」のようだった建物を手術可能な診療棟につくりあげ、必要に応じて医療活動を拡大。八六年のＡＬＳ（アフガン・レプロシー・サービス）設立を手始めに、パキスタン内の難民キャンプでのフィールドワークを重ねながら、九一年からはアフガニスタン国内に診療所を建設してゆきました。このとき国際社会のアフガン支援の潮流は都市部へと向かいましたが、それに背を向けるように医者や病院のない山岳部に三カ所の診療所をつくったのです。

私たちのプロジェクトは、国際社会が撤退した後の空爆の中での診療や井戸掘削の継続のように、国際社会の潮流とは逆の方向に向かうことが往々にしてありました。会にはこれという方針はありませんが、中村医師が時に口にする言葉があります。

『みんなが行くところには誰かが行くから行かなくてもよい。誰も行かないところにこそ行く必要がある』

一見天の邪鬼に見えますが、みんなが同じことを言い、同じ方向に動き始めるとき、そこにはフィクション（虚構）があるのではないか、というのが私たちの得た教訓です。

これまで私たちの活動にはいくつかの転機がありました。ミッション病院と別にＡＬＳをつくったこと。アフガン山岳部の診療所建設。それを統合したＰＭＳ病院の建設。それに二〇〇〇年から旱魃対策としての井戸掘削と農業用水路の建設。それはスフィンクスの謎を一つ一つ解いてゆく作業ともシジフォスの苦行とも見えました。ともあれ、長い戦乱と旱魃に苦しめられるアフガニスタンの復興にいささかなりとも寄与すると同時に、私たち自身が何か豊かなものを与えられてきた三十年だった気がします。皆様の変わらぬご支援に感謝いたします。

＊東日本大震災から三年が過ぎました。被災された方々はさらに過酷な忍従の暮らしのなかにいらっしゃることと思います。「東京オリンピック」がさらに忘却と欺瞞を生み出すのではと危惧しております。みなさまの日々の健康と心のやすらぎの訪れることをお祈りいたします。

ペ村から――――――――――――♪

こんにちは。私が事務局の扉を開けたのは、五年半ほど前。パワフルな妹に誘われたのがきっかけでした。ペシャワール会について予備知識があまりないまま入会しました。入ってみて、その活動の奥深さと全国の支援者の方々の「中村哲先生を支える」という熱き思いを知り感動しました。それ以来、笑顔で迎えて下さった事務局の皆様の御指導のもと、礼状書きや切手の整理などをしていましたが、二年半前より両親の突然の入院、義母の入退院の繰り返しの日々となり、気持ちに余裕のない毎日を過していました。

そのような中、先日、治安の悪化するアフガニスタンで命をかけて信念を貫いておられる中村先生とワーカーの方の報告会に参加して、気持ちを新たにすることができました。時々になりそうですが、またお手伝いに伺わせて下さいませ。（ＴＫ）

医者、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村哲　用水路建設事業の7年をつづった感動の記録　【5刷】1800円

辺境で診る辺境から見る
【3刷】1800円

医者 井戸を掘る　【12刷】1800円

医は国境を越えて　【6刷】2000円

ダラエ・ヌールへの道
【5刷】2000円

ペシャワールにて　【8刷】1800円

アフガン 農業支援奮闘記　高橋修・編著
農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録　2500円

聖愚者の物語　甲斐大策

1800円

石風社　福岡市中央区渡辺通2-3-24　電話092（714）4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る
アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）
1900円

岩波書店　東京都千代田区一ツ橋2-5-5　電話03（5210）4000

価格はすべて本体価格（税別）です

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。

②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。

③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。

④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。

⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。

⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。

⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。

⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。

⑨本会の事務局をＦＡＲＡＨＯＵＳＥ（〒八一〇―〇〇四一　福岡市中央区大名一丁目一〇―二五　上村第二ビル六〇三号 TEL〇九二―七三一―二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810-0041　福岡市中央区大名1丁目10-25　上村第2ビル603
電話092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790−7−6559
発行日　2014年4月1日　No.119　会長　後藤哲也　現地代表　中村哲